

## 第2次移住地への移住とコミュニティの形成

——長崎県北松地域褥崎地区——

叶 堂 隆 三

### 目 次

はじめに

- 1 第2次移住地の形成
  - 長崎県の信徒の移動と第2次移住地の形成
  - 第2次移住地のコミュニティの特徴
  - 第2次移住地の展開と他出
  - 本稿の目的
- 2 北松地域（褥崎地区）の地域概況
  - 交通
  - 産業
  - 褥崎地区の主産業
- 3 褥崎地区への開拓移住と定住
  - 開拓移住の経緯と初期の生活
  - 褥崎地区への定住一世帯の増加
  - 生産活動の展開
- 4 宗教コミュニティの形成
  - 褥崎小教区の形成
  - 小教区の展開
- 5 コミュニティの展開—地理的広がり—と他出—
  - 宗教コミュニティの広域化
  - 旧鹿町町外への他出
  - 大加勢地区における他出
- 6 第2次移住地の形成と展開—その社会的特徴—
  - コミュニティ形成の社会的特徴
  - 褥崎地区におけるコミュニティ形成と移動の特徴

### はじめに

長崎県はカトリック教会の多い県として知られている。一般に、江戸期の潜伏キリシタンの歴史に由来すると思われるが、明治期以降にカトリックに復帰した信徒の生活展開が信徒の増加と教会の展開に関係したことが判明しつつある。

すなわち、明治期以降の信徒人口の急増とその過剰人口化が信徒の移住（開拓移住）を引き起こし宗教コミュニティが数多く形成されたこと、さらに宗教コミュニティを形成した信徒の移動が4期に区別できること、等である。

本稿では、こうした知見に従って、長崎県佐世保市褥崎地区への江戸末期・明治期の移動の事例を長崎の信徒の第2次移動に位置づける。その上で、褥崎地区への移住の経緯と生活の展開、宗教コミュニティの形成を把握し、第2次移住地におけるコミュニティの形成状況と第3次移住地への移住が同時に生じる第2次移住地の社会的状況の解明をめざす。

### 1 第2次移住地の形成

#### 長崎県の信徒の移動と第2次移住地の形成

長崎県は、日本の都道府県の中でカトリック信徒の比率が最も高く、教会数および出身司祭の数も最も多い「カトリック県」といわれる。こうした長崎県の信徒状況は、しばしば潜伏キリシタンの歴史に結びつけられる。しかし、長崎県の信徒の状況は、潜伏キリシタンの歴史だけで説明できるものではない。むしろ、多くの潜伏キリシタンがカトリックに復帰した後の生活の展開に信徒数と教会数の増加の「鍵」が見出されつつある。すなわち、江戸末期および明治以降のカトリック信徒人口の急増とその過剰人口化が信徒の移住（開拓移住）を引き起こし、長崎県内に多くの宗教コミュニティが形成されたと見ることができるのである（叶堂 2014年 19-22頁）。

また、こうした宗教コミュニティの形成にむすびつく長崎県のカトリック信徒の移動は2世紀近くに及び、大きく4期に区分できる（叶堂 2014年 22-24頁）。長崎県のカトリック信徒の最初の移動は、江戸後期の西彼杵半島外海地区から五島藩・平戸藩・佐賀藩の開拓計画に応じたものである。この移動は過剰人口が必ずしも背景のすべてとはいえないものの、信仰生活の維持とともに移住による経済生活の安定の希求が背景にあったといえよう。江戸末期・明治初期に、この第1次移住地である五島・黒島等

および外海地区から新たな開拓移住が生じる。

### 第2次移住地のコミュニティの特徴

この第2次移住は禁教による迫害を逃れるための逃散と同時期で、両者が重複する事例も多い。しかし、この移住が発生した要因に、第一次移住地の（生産）条件不利性と第一次移住地における過剰人口の発生が想定できる。前者は、第一次移住地への入植の新来・後発（いわゆる居付き）性と信仰の秘密保持の理由から、農業生産や居住に適さない条件不利地区・地域への移住という性格を帯びたことによる。そのため、低い農業生産性を補完するために仏教集落等の他集落の網元（経営者）に雇用される漁労収入に依拠せざるを得なくなることである。後者は、教会法で規定される自然妊娠の影響も加わり、人口が急増するとともに潜伏キリシタン・カトリック信徒の家族に特有の均分相続制度によって地区内の分家の出現と農業経営の一層の零細化が引き起こされたことによる。

こうした零細規模の農業と漁労の兼業という生活形態から脱却し、安定した農業経営を実現するための数少ない戦略が、挙家離村による開拓移住である。第1次移住地の一つ黒島の事例では、零細規模の農業とリスクを生む漁労から脱出を図る世帯が、農地・家屋を売却した資金を基に開拓移住地で農業経営をめざし、その一方で、残留世帯が挙家離村の世帯の農地・家屋を獲得して、経営規模の拡大あるいは現在の経営規模を維持したままの分家の創出を図るという仕組みが見られた（叶堂 2014年 16-17頁）。

こうした第1次移住地および外海地区からの移住地に、佐世保市褥崎地区や神崎地区をあげることができる。さらに第1次移住と第2次移住の初期の時期に生じた外海地区から長崎市の大山・善長谷や長崎港沖の伊王島・大明寺・高島等への移住を含めることもできよう。

また、第2次移住は、重複した社会関係（血縁関係・地縁関係・類縁関係）の発動により、特定の地区・集落から集合的・連鎖的な移住であったことが想定される。そのため、移住後も重複した社会関係が基盤になり、いわば元村の社会・生活が枝村で再生される場合が多い。とりわけ類縁関係の一つである信仰の維持を移住者が強く希求しているため、移

住先に宗教コミュニティが形成される傾向が想定される。

同時に、第2次移住が営農をめざす開拓移住であるために、住民・世帯は類縁（同業）関係でも結ばれることになる。そのため、第2次移住地の地域類型は、信仰の共同と生活の共同が重なる「意図的コミュニティ」に位置づけることができよう。

### 第2次移住地の展開と他出

この第2次移住は農業経営を志向する挙家離村であるものの、これまで農地とされていない条件不利地区への開拓移住で、開墾作業と斜面地や高台等での生産活動に従事することになる。

同時に、信仰の維持による多子傾向が持続すると推測される。この移住地でも均分相続制度が持続され、子ども世代の成長とともに分家の創出と農業経営の零細化が進行する。そのため、零細規模の農業生産を漁労収入が補完する経営に展開する世帯と第3次移住地に他出を志向する世帯が現われると推測される。同時に、こうした第2次移住地における信徒人口・世帯の増加は、信仰の制度化（教会の設立）の志向を強めると推測される。

つまり、第2次移住地では、（1）分家の創出による地区の世帯（人口）の増加、（2）宗教コミュニティ形成の志向性、（3）常態的な挙家離村による人口の流出、という3つの事象が同時進行すると推測できる。このうち（1）と（2）は生産形態の転換に関係し、（3）は移住地の狭小性に関係すると推測される。こうした一連の展開は、外海地区および第1次移住地における状況の再現といえる。さらに第2次移住地からの第3次移住は、初期には農業の継続と規模拡大を希望する開拓移住を志向し、その後は産業化が進行する都市部や炭鉱等に移住先が拡散したと推測されよう。

### 本稿の目的

本稿の目的は、まず第2次移住地における移住とコミュニティの形成に関する上記の推測を長崎県佐世保市褥崎地区の事例を通して検証することにある。

第一の観点は、褥崎地区の次の二つの状況の把握を通して、第2次移住地のコミュニティ形成の特徴を確認することである。すなわち、

第一は、初期の移住の経緯と定住の状況を跡づけることで、第2次移住地における地域社会の形成の特徴を確認することである。

第二は、教会設立の経緯一類縁（信仰）関係の制度化一の把握を通して、第2次移住地における宗教コミュニティの形成を跡づけることである。

第二の観点は、褥崎地区のコミュニティの展開とその背景の把握を通して、第2次移住地のコミュニティ展開を解明することである。すなわち、

第一は、（1）農業経営から漁業・水産加工業への生産基盤の転換を跡づけるとともに、（2）それを背景とする地区の人口動向一分家の創出等一を把握することである。

第二は、（1）佐世保・北松地区における開拓地・移住地や産業の展開に関連づけながら、（2）他出の動向を明らかにすることである。

本稿では、第2節で北松地域および褥崎地区の地域概況にふれた上で、第3節の前半で、第一の観点の第一の褥崎地区への開拓移住と定住の状況を明らかにし、第3節の後半で、第二の観点の第二の（1）の褥崎地区への定住の状況と（2）の生産活動の展開について触れる。次に第4節で、第一の観点の第二の褥崎地区における宗教コミュニティの形成を明らかにする。さらに第5節で、第二の観点の第二の（2）に関して、褥崎地区からの他出の状況を明らかにする。最後に第6節で、第2次移住地の社会的特徴を検討する。なお第4節および第5節の中で、褥崎小教区の巡回地で炭鉱のあった大加勢地区（大加勢教会）の状況にも言及する。

## 2 北松地域（褥崎地区）の地域概況

褥崎地区（長崎県佐世保市長串）は、図1のように、北松浦半島のうち佐世保市と平戸市に広がる九十九島北部（北九十九島）の島々に組み合った複雑な海岸に位置する。褥崎地区は、北松浦郡旧鹿町町が2010年に佐世保市と合併したため、現在、佐世保市の一部である。旧鹿町町は旧平戸藩領で、現在は長崎県内の地区区分で北松地区あるいは佐世

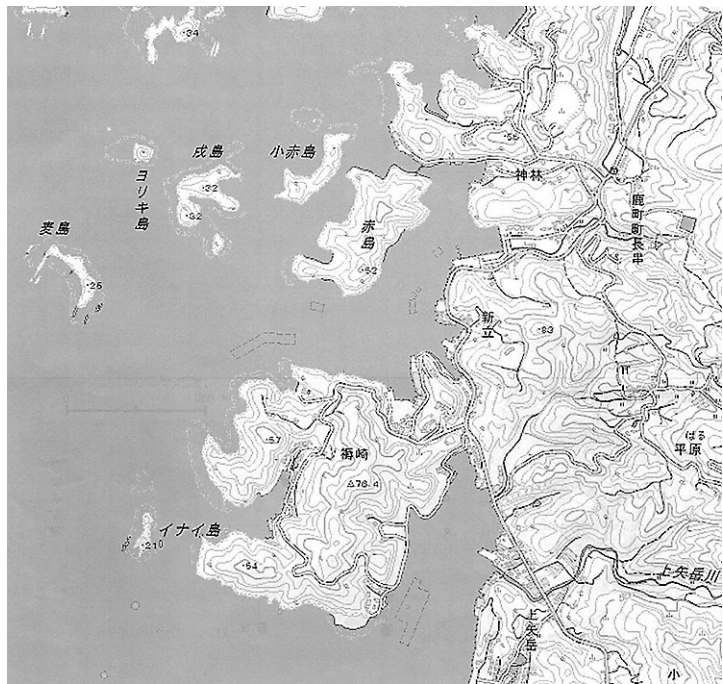


図1 佐世保市褥崎地区

保・北松地区に位置づけられている。

### 交通

複雑な地形の北松地区の旧鹿町町は、長らく「陸の孤島」（鹿町町郷土誌 454 頁）と呼ばれていた。明治・大正初期まで、佐世保市（相浦）—江迎町の海岸沿いには道らしい道がなく、その間には「満潮時には、足場を拾って歩かねばならないような波打ち際をまがりくねった悪路」（鹿町町郷土誌 455 頁）さえあったという。1929（昭和4）年に相浦—小佐々—鹿町—江迎を結ぶ府県道（江迎—相浦線、後に佐々—鹿町—江迎線に改称）が建設され、ようやく「陸の孤島」の名を返上する。なおこの頃にバス路線が開通している。

北松地区では、昭和初期まで海上交通が移動の中心であった。明治中期まで北松・平戸地区の中心の平戸と旧鹿町町が海上交通で結ばれ、大正期以降に旧鹿町町（歌ヶ浦）—相浦（佐世保地区）の間に定期（渡海）船が就航する。鉄道に関して、1939（昭和14）年に北松地区中央部に鉄道（現在の松浦鉄道）が開通し、旧鹿町町の北隣に江迎駅が開設される（鹿町町郷土誌 462-478 頁）。

### 産業

明治・大正期の北松地区（旧鹿町町）の主産業は

農業で、1883（明治16）年の旧鹿町町の474世帯の84%が農業世帯である。しかし、大正・昭和期には北松・佐世保地区で炭鉱開発が進む。旧鹿町町でも数多くの炭坑が採炭を開始し、第2次産業人口および地域人口が急増する。

旧鹿町町の世帯数は、1920（大正9）年に842世帯（5802人）、1925（大正14）年に1325世帯（6740人）、第二次世界大戦前の1938（昭和13）年に2477世帯に増加し、20年間に世帯数が3倍に増加するとともに、鉱業に従事する世帯が旧町の世帯の62%に達する。さらに高度経済成長期の1956（昭和31）年には世帯数が3686世帯に達し、鉱業に従事する世帯も52%と旧町の世帯の半数を超える。

### 褥崎地区の主産業

さらに、褥崎地区の主産業である水産業にふれたい。明治初期の旧鹿町町の漁業世帯は2地区30世帯で、旧鹿町町北西部にある大屋地区が25世帯、褥崎地区が5世帯である。1872（明治5）年の戸籍簿によれば、大屋地区の世帯数が119戸、褥崎地区の世帯数が18世帯であり、漁業世帯は両地区世帯の約5分の1から4分の1に留まる。この時期の漁業は、無動力船で沿岸を漁場とする一本釣り、鉾突き、小網漁というものであった（鹿町町郷土誌413-414頁）。そのため、漁業はまだ両地区の主産

業といえる状況にはなかった。

明治後期になると旧鹿町町の漁業世帯は70~80世帯に増加し、動力船による巻き網、刺網、ひき網、延縄漁に代わっていく。しかし、大正・昭和初期は、漁業世帯は増加するものの、炭鉱開発とともに大屋地区・褥崎地区でも炭鉱労働に従事する住民が現われたという（鹿町町郷土誌414-415頁）。

第二次世界大戦後の1950年代後半の鹿町町の漁業世帯は170世帯で、大屋地区113世帯・褥崎地区57世帯である。内訳は、専業43世帯・第一種兼業55世帯・第二種兼業72世帯で、鹿町町の産業別就業人口の2%である。この頃から、沿岸漁業から養殖漁業（浅海増養、殖真珠等）に水産業の中心が移行する（鹿町町郷土誌416-423頁）。

### 3 褥崎地区への開拓移住と定住

次に、褥崎地区のコミュニティ形成を見ていきたい。まず江戸末期における褥崎地区への草分け世帯の移住を跡づけ、次に褥崎地区への定住に関して、主な家系における分家創出と褥崎地区における生産活動の展開を明らかにする<sup>(1)</sup>。

#### 開拓移住の経緯と初期の生活

褥崎地区への最初の移住は、江戸時代末期とされ

表1 褥崎に移住した家系と移住時期

時期	家系	移住の年と移住元等
江戸期	吉浦末蔵家	1858-1864 外海→五島→吉ノ浦に居住
	北平（新立・吉浦・吉浦）家	1860-1865 外海→五島（若松瀬戸カズラ島）→褥崎 福蔵は1868年
	新立宗エ門家	1864年 五島→新立に移住
	吉浦豊作・音次郎家	1864年頃 五島から移住
	山村重蔵家	1864年頃 五島から移住。伝道師として活躍
	浦田長蔵家	慶応年間（1865-68） 五島（曾根）→黒島→水場に移住
明治期	吉浦庄蔵・要七家	1868-1870に外海→五島（大平）から長男・三男が移住
	吉浦久米蔵家	1870に褥崎に移住 外海→下五島→樺島→平戸 明治期に弟が褥崎、兄が神崎に移住
	山村茂吉家	1872-1876 五島（赤島）→平戸、明治に入り褥崎
	木村伝作家	1875-1878年 平戸（赤松崎）から 別の木村家は1868-73年に五島（大平）から
	吉浦伊勢吉家	明治期に移住 外海→堤（若松島）→平戸→褥崎
	梅田家	明治中期？ 黒島→平戸→田平 赤島に移住
	堤仁蔵家	1890（明治23）年 黒崎→田平から朝地露
	吉山家	上五島→赤島
竹川家	黒島→田平を経て褥崎	

他に、吉山家・中村家・川原家・浜口家・樫山家・田中家・田島家・鳥羽家・山下家・前田家・大江家・瀬戸家・久我家・久保家・寺田家

出典：『褥崎128年一褥崎小教区沿革史』（1992年）の記事・家系図をもとに作成。

る。表1は、褥崎地区に江戸期・明治中期までに居住した家系の一覧である。このうち吉浦末蔵家、北平家（新立福蔵家・次男吉浦忠蔵家・四男吉浦藤七家）・新立宗エ門家、吉浦豊作・音次郎家、浦田長蔵家は江戸末期の移住とされ、いずれも移住後にその地に由来する姓を名乗る草分けである。

新立宗エ門家の三男喜八の長男宗次郎（1894年生れ）の次男静夫氏（第3世代、78歳）のメモには、「私たちの先祖は、五島からきたそうです。先祖のウゾウさんとゆう人が平戸のどの様に褥、新立ちくの土地を相談に行ったところ10家ぞくをまとめなさいといわれ、10家ぞくまとめて、この土地を求めたそうです」と記されている。

一方、『褥崎128年』には、五島地域から移住者8世帯ばかりが吉ノ浦と新立に居付き、藩有地の管理人である山番の浦田甚兵衛の許可を得て、昼間は山の開墾に励み、夜はイワシ漁をして生活の糧を得ていたとされる（褥崎128年45頁）。また新立宗エ門の長男宇蔵については、単身上五島を小舟で出航して新立の入江に漂着し、漂着後は「木下し」（石炭採掘のためのトロッコ用線路枕木運び）の賃仕事についたとされる（褥崎128年42-43頁）。また『鹿町郷土誌』には、慶応元年頃、五島方面から安住の地を求めて平戸方面に流れて来た者の一部が霞ノ浦（吉の浦）、新立に住みつく。この15家族は松浦藩からこの土地を与えられ移住したともいう、と記されている（鹿町郷土誌787-8頁）。この時期の平戸藩では、農民層の分解による農業労働力の減少が大きな問題となり、農村間における過剰労働力の配置や山林原野の開墾・新田開発が奨励されている（鹿町郷土誌351頁）。こうした記録から、少なくとも褥崎地区への草分けの世帯が五島か

ら移動して来たこと、平戸藩の許可を得た開拓移住であったことは確かであろう<sup>(2)</sup>。

表2は、江戸末期に移住した草分けの5家系の移住時期と家族の年齢を推定したものである。家族の年齢および家系情報から世帯数を推計すれば、吉浦末蔵家1世帯・北平家3世帯（長男・次男・四男）、新立新エ門家1世帯、吉浦豊作・音次郎家2世帯、山村重蔵家1世帯、浦田長蔵家1世帯の9世帯になる。このうち吉浦豊作・音次郎家を1家系とすれば8家系となる。一方、北平家の長男福蔵の長男宇蔵に長男精太郎が1862年に誕生していることから宇蔵を別家とするか、あるいは「褥崎128年」で第一陣のグループと記される吉浦常次郎（吉浦末蔵の次男梅蔵の妻キクの前夫か？ 1862年に長女が誕生している。なお家系は不明）の加えるならば10世帯となり、新立静夫氏のメモの数値に一致する。さらに福蔵の長男の宇蔵と吉浦常次郎に1868-70年に移住の吉浦庄蔵・要七家2世帯を加えれば、13世帯となる。こうした推計から、入植世帯で10世帯、家系で8家系、また若干草分けの時期を拡大すれば15世帯に近い世帯数になり、文献やメモの数値に齟齬はない。

草分け世帯が入植した当時の褥崎は、「森林が繁る山が海岸に迫る入江で、とても人の住めるような所ではなかった。しかし反面、それが信仰を守るための絶好の隠れ場所となった」（褥崎128年45頁）とされる。こうした褥崎の半島の突端の地、すなわち半島南側に口を開いた湾岸（吉ノ浦・霞ノ浦）に吉浦末蔵家と北平の一族の忠蔵家・藤七家が居住し、その後、吉浦姓を名乗る。褥崎の半島付け根の西側の湾岸（新立）に、北平一族の福蔵と新立宗エ門家が居住し、その後、いずれも新立姓を名乗る。

表2 草分け一族の移住時の推定年齢

草分けの一族	移住時期	移住者の推定年齢
吉浦末蔵家	1858-1864年	末蔵 39-45歳・長男重吉 12-18歳・次男梅蔵 9-15歳、三男岩太郎 3-9歳・四男清吉 0-6歳
北平（新立・吉浦・吉浦）家	1860-1864年	長男福蔵 43-47歳（その長男宇蔵・次男忠助 16-20歳）・次男忠蔵 41-45歳・四男藤七 33-37歳
新立宗エ門家	1864年	宇蔵 20歳・次男弥助 8歳・三男喜八 3歳・四男藤吉 1歳
吉浦豊作・音次郎家	1864年	長男豊作 48歳・次男音次郎 37歳
山村重蔵家	1864年	重蔵不明
浦田長蔵家	1865-1868年	長蔵不明・長男末松 17-21歳（その長男 1968年生れ）・次男樫山寅吉 14-17歳・三男吉浦治作 12-15歳

出典：『褥崎128年—褥崎小教区沿革史』（1992年）の記事・家系図をもとに作成。

一方、半島付け根の東側の湾岸（水場）に、浦田長蔵家が居住する。浦田姓は、水場に居住していた平戸藩士浦田甚平衛から譲られたものといわれる。一方、明治期に褥崎地区に移住した世帯は、神林地区沖に浮かぶ赤島と褥崎地区に隣接する神林地区の北側の長串山の山麓の朝地露に居住する。

江戸期の褥崎地区入植で興味深いのは、褥崎の南5 kmに立地する神崎地区（佐世保市旧小佐々町）と関係が深いことである。例えば、北平家の場合、次男忠蔵と四男藤七は五島地域から神崎地区に移住した後に褥崎地区吉ノ浦に転じ、三男喜蔵は神崎に残り有安姓を名乗る。山村重蔵家も五島地域から神崎地区を経て褥崎地区に移住する。また明治初期になるが、吉浦久米蔵家（清蔵の次男が久米蔵）でも、その長男八蔵が神崎に移住している。こうした関係からか、その後も神崎地区の間にしばしば養子・婚姻関係が存在する。

明治期の褥崎地区への移住の特徴は、五島地方から平戸地区を経由した世帯や黒島からの移住世帯、さらに明治中期の開拓地である田平地区を経由した世帯が存在すること、吉ノ浦や新立以外の地である赤島や朝地露に入植していることである。

いずれの時期の褥崎地区への移住も、安定した農業経営をめざすものである。しかし開拓移住であるために山地の開墾の作業に加えて、夜は収入源の漁労に従事する生活であった（褥崎 128 年 45 頁）。

#### 褥崎地区への定住一世帯の増加

江戸末期から明治中期の間に、褥崎地区に入植した多くの家系・世帯が定住する<sup>(3)</sup>。明治初期のキリシタン弾圧で一時的に馬渡島に避難した家族も褥崎地区に帰還し、明治期以降に褥崎の多くの家系で世帯（分家）が創出されていく。

表3は、世代の展開を資料で確認できる11家系

に限られるものの、分家創出と関係の深い男性の状況を示したものである。なお江戸末期に移住した草分け家系と明治中期に移住した家系の間には一世代程度の差があるために、便宜的に江戸期と明治期の移住家系を一世代ほどずらしている。一世代を25～30年と推定しているため、実際よりも後の時期に区分されている家系もある。

この推定において、江戸末期、褥崎に移住した11世帯は、明治中期（1900年）までの約30年間に分家が創出され、第二世代が24世帯に増加する。また明治期に移住の9世帯が新たに加わったため、当初の世帯数は3倍の33世帯に増加する。実際には、この推計値に若干の女性世帯が加わるものの、少し前の時期の1878-82（明治11-15）年に褥崎地区（吉ノ浦・水場・新立・赤島）で27世帯・130人の信徒数という記録（褥崎128年56頁）や少し後の時期の1897-1919（明治30年～大正8年）の時期に48世帯・約200人の信徒数という記録（褥崎128年63頁）と齟齬はない。

その四半世紀後の昭和初期（1925年）には、江戸末期の移住世帯（第三世代）は39世帯、明治期に移住の9世帯は第二世代が15世帯に増加し、褥崎地区の世帯の推計値は54世帯に及ぶ（実際には、若干の女性世帯が加わる）。

さらに、その30年後の昭和中期（1955年）になると、江戸末期の移住世帯（第4世代）は33世帯と減少に転じるものの、明治期の移住世帯（第三世代）が昭和初期の2倍の32世帯に増加して、褥崎地区の世帯数は65世帯に達する。なお昭和中期（1955年）の褥崎地区の世帯数は56世帯（うち1世帯は非カトリック世帯）とされ（鹿町町郷土誌209頁）、1967年の信徒数は約400人である（褥崎128年72頁）。仮に1世帯6～7人とすれば57～67世帯となるため、推計値は実際の世帯数をやや上

表3 各世代（男子）の地区内居住の状況

推定時期	江戸末期	明治中期 (1900年)	昭和初期 (1925年)	昭和中期 (1955年)	昭和後期 (1985年)	平成期
江戸時代末に移住の家系	第一世代	第二世代	第三世代	第四世代	第五世代	第六世代
	11	24	39	33	29	—
明治以降に移住の家系	—	第一世代	第二世代	第三世代	第四世代	第五世代
	—	9	15	32	24	12
合計	11	33	54	65	53	—

出典：『褥崎128年—褥崎小教区沿革史』（1992年）の家系図をもとに作成。

回っている。

その30年後の昭和後期（1985年）になると、江戸末期の移住世帯（第五世代）・明治期の移住世帯（第四世代）ともに世帯の推計数が29世帯・23世帯に減少し集落世帯数は52世帯に減少する（実際には、若干の女性世帯が加わる）。ただし、この世代には家族形成前の未成年層の存在もあって明確な数値とはいえない。

とはいえ、こうした家系を辿ることのできた世帯の推計値から、明治期における草分け世代の分家の創出と新たな来住世帯による世帯の増加という形態が大正・昭和初期および第二次世界大戦後の高度経済成長期における地区内における分家の創出による世帯の増加という形態に転換したことが明らかになる。

## 生産活動の展開

### ① 水産業

安定した農業経営をめざした開拓移住であったものの、褥崎地区は小さな半島とその付け根の鬱蒼とした斜面地の開拓という条件不利地区の農業である。しかも定住後しばらくして第2世代（子ども世代）の成長・独立の時期にキリシタン・カトリック信徒に特有の均分相続制度による土地・農地の細分化が始まったために、褥崎地区の農業世帯は「猫の額程に狭い畑で収穫されるイモ、麦では生活は維持できなかったはず」（褥崎128年160頁）という状況に陥る。

実際、表4のように、褥崎地区に移住後に他出した世帯・人も相当数に及ぶ。しかし、狭小の斜面地に拓かれた段々畑でサツマ芋や麦の生産という状況にもかかわらず、明治以降も褥崎地区に来住世帯が続き、定住世帯で分家の創出も可能になっている。この状況の背景として、農業から水産業への住民の

表4 旧鹿町町外の移住地（男性）

	明治30年代 (1900年)	昭和初期 (1925年)			昭和中期 (1955年)			昭和後期 (1985年)			平成期	合計
	第江戸 世代期	第江戸 世代期	第明治 世代期	合計	第江戸 世代期	第明治 世代期	合計	第江戸 世代期	第明治 世代期	合計	第明治 世代期	
江迎								1		1		1
神崎			2	2	1		1		2	2		5
佐々・小佐々					3		3		1	1		4
浅子（梶ノ浦）		1		1	1	1	2		2	2	2	7
相浦・大崎	1	1		1							1	3
佐世保市（その他）		4		4	2		2	3		3		9
田平		1	1	2	6		6		3	3		11
平戸		1		1	3		3		2	2		6
松浦						1	1					1
北松・佐世保・平戸地区小計	1	8	3	11	16	2	18	4	10	14	3	47
長崎					2		2	2	1	3		5
大村					1		1					1
大島					1		1	1		1		2
長崎県内小計					4		4	3	1	4		8
九州（長崎県外）		1		1	1	1	2					3
中国・四国					1		1		2	2		3
大阪		1		1	5	1	6	8	6	14	3	24
関西（大阪以外）		1		1	2	1	3	3	2	5	1	10
愛知・中京					2		2	1	4	5	2	9
関東											2	2
その他											3	3
国内小計		3		3	11	3	14	12	14	26	11	54
ブラジル		7		7	9	3	12	1	6	7		26
合計	1	18	3	21	40	8	48	20	31	51	14	135

出典：『褥崎128年—褥崎小教区沿革史』（1992年）の家系図をもとに作成。

表5 明治・大正期における褥崎の漁労組織

時 期	上段：名前・役割・漁法	構 成 員
	下段：家系	
1890年～	吉浦牧太郎 網元（網旦那）	兄弟（藤七家）長男仙蔵・三男力造・四男末吉・五男好太郎
	第2世代・吉浦忠蔵家の養子（吉浦藤七次男）	親族（新立福蔵の次男忠助） その他（新立宇蔵の長男宗吉）
	新立宇蔵 網元（網旦那）	その他（吉浦末蔵家第2世代次男梅蔵・三男岩太郎・四男清吉）
	第1世代・新立宗エ門家長男	
	新立宇蔵 網元（網旦那）	子ども（次男留造・三男三ノ助・四男熊蔵）
	第1世代・新立宗エ門家長男	兄弟（三男喜八・四男藤吉・三女ソナ）
	吉浦梅蔵 網元（網旦那）	子ども（長男善太郎・次男又蔵・三男磯吉）
	第2世代・吉浦末蔵家次男	
吉浦又蔵 イワシ網漁	子ども（長男梅太郎・次男秀行・三男末蔵・四男菊次郎）	
第3世代・吉浦末蔵家次男の次男		
1910年～	浦田長市 まき（縫切）網	兄弟
	第3世代・浦田長蔵家長男の次男	親戚

出典：『褥崎 128年—褥崎小教区沿革史』（1992年）160-161頁を整理したもの。

生産基盤の転換が指摘できよう。

すでにふれたように、明治初期の褥崎地区（18世帯）の漁業世帯は5世帯にすぎないものの、明治中期には、褥崎地区の住民は漁労組織を形成し、本格的に漁業に従事するようになる。最初に着手したのが、地曳網である。6人乗りの漁船2隻にイワシの見張り人1人を加えた13人で操業する漁法である。表5に褥崎地区における漁労組織を示している。いずれも草分けの家系の第2世代の吉浦牧太郎・第1世代の新立宇蔵・第2世代の吉浦梅蔵・第3世代の吉浦又蔵が網元や中心になって、兄弟や子ども、親族を構成員とした組織である。

1910（明治43）年以降は、巻き（縫切）網が行われるようになる。巻き網漁は、網舟・灯舟・くち舟各2艘で船団を組み30人規模で操業する漁法である。この時期の巻き網もやはり草分けの家系の第3世代の浦田長市が中心である（褥崎128年160-161頁）。

明治前期には、漁獲したイワシを家族が売り歩き、米麦と交換する程度であったが、漁獲量の増加とともに、イリコの製造あるいは仲買人への販売に転じる。また売上高から諸経費を引いた利益は、網ダンナと網子で配分したという（褥崎128年161頁）。

明治から大正時代にかけて、旧鹿町町の漁業世帯数は7,80戸に増加し、褥崎地区の漁業世帯は25世帯前後と推定できる<sup>(4)</sup>。地場の資本で立ち上げられた漁労組織であるため零細で安定性を欠き、失敗

に終わるものも多かったものの、その度、いずれからの漁労組織が立ち上げられたようである。また漁法も巻き網に刺網・曳網・延縄が加わり、大正時代には動力船が導入されるようになる（鹿町町郷土誌415頁・褥崎128年161頁）。さらに時期不詳であるものの、地区の住民によって砂浜だった褥崎の海岸を神林地区にあった鉾山のボタや近くの島の小石を用いて漁港整備をし、本格的な漁業に対応させている（褥崎128年162頁）。

大正・昭和期は、さらに漁業が高度化する。動力船によるイワシ刺網で大羽イワシを求めて、漁場は褥崎沿岸から北松大島・西彼方面に広がる。第二次世界大戦後になると中型まき網漁業に規模が拡大し五島・壱岐の海域で操業するようになり、水揚も飛躍的に伸びる。またイワシの漁獲にとどまらず水産加工（煮干しの加工）も盛んになっていく（鹿町町郷土誌415頁・褥崎128年161頁）。

1960年代後半以降になると、安定した漁業収入・経営をめざして養殖事業に取り組む世帯が増加する。聞き取りによれば、養殖は家族経営で可能である。養殖者数と市場の動向によってハマチ・タイ、さらにフグ・ヒラメと魚種を変えて養殖に取り組んでいる。またカキやアサリ貝・アコヤ貝といった貝類の養殖に取り組む世帯もある。さらに三重県等から進出した真珠業者とともに真珠養殖に従事する世帯もある。

表6は、褥崎地区及び近隣地区に居住する住民の職業経験を示したものである。年配の世代では、家



表6 住民の職業経験

名前	年齢	家系	農業	職業キャリア
Y・H	85	吉浦末蔵家第5世代	○ イモ	巻き網（従業員25人）を運営していた。
S・M	82	新立字蔵の弟藤吉の第3世代	○ イモ・米。 販売収入	父親の経営する巻き網（カタクチイワシ）。その後、中型まき網経営（アジ・サバなど養殖の餌、従業員20人）。煮干し加工。現在は子どもが継ぐ。
S・S	78	新立字蔵の弟喜八の第3世代	○	巻き網の手伝い→いりこ加工（10人雇用）→養殖（ハマチ→マダイ→フグ・カワハギ）。
U・H	68	浦田長蔵家第5世代 太郎ヶ浦	-	漁業に従事→漁業会社経営（カタクチイワシ→アジ・サバ・イワシ）。現在は子どもが経営、7隻の船団。
Y・Y	58	吉浦末蔵家第6世代	-	巻き網（イワシ）と煮干し製造。
Y・K	-	山村茂吉家第6世代 第5世代で朝地露	○ イモ・米の 販売収入	親の代は巻き網。漁業（養殖）会社勤務→重機のオペレーター→造船→真珠養殖。現在は、漁業と魚の移動販売。

注：2014年11月の下関市立大学（叶堂ゼミ・加来ゼミ）の聞き取り調査の内容を整理したものである。

表7 褥崎地区内外の水産業者

業種	巻き網		煮干し加工	養殖業	業種	煮干し加工	養殖業	活魚販売	業種	養殖業	活魚販売
	中型	小型									
1 新立 松雄	○			○	12 新立 利雪	○			28 田中 更生	○	
2 吉浦 磯次	○			○	13 新立 静夫	○	○		29 田中 正雄	○	
3 山村 政行	○			○	14 浦田 栄二	○			30 新立マサ子	○	
4 吉浦 初義	○			○	15 新立 時義	○			31 新立 武雄	○	
5 吉浦 文作	○			○	16 堤 忠行	○			32 新立 正	○	
6 浦田 初美	○			○	17 山村 健治	○			33 新立 信行	○	
7 新立 勝利		○			18 吉浦 幸助	○			34 新立 義則	○	
8 新立 政男		○	○		19 吉浦 正司	○			35 吉浦 常行	○	
9 吉浦 義巳		○	○	○	20 吉浦 初夫	○			36 吉浦 福馬	○	○
10 吉浦 博昭		○	○	○	21 新立 和美	○	○		37 吉浦 洋一	○	
11 樫山 高則		○			22 山村 留次	○			38 梅田 朝雄	○	○
出典：『褥崎128年—褥崎小教区沿革史』（1992年）165-166頁の一覧を整理したもの。					23 樫山 勝正	○	○	○	39 樫山 寅一	○	
					24 吉浦 光義	○	○	○	40 吉浦 照吉	○	
					25 吉浦 春夫	○	○		41 吉浦 恵	○	
					26 吉浦見喜義	○	○				
					27 新立 成利	○					

業の手伝い等を通して漁業に従事し、その後に親の経営を引き継ぐという巻き網経営のキャリア・パターンが見られる。また漁業からイリコの加工に転業したり、業務を拡張するパターンも見られる。一方、その下の世代には、漁業会社に従業員として雇用される住民もいる。

なお、表7は、褥崎地区の1990年代前半の水産関係の経営状況を示したものである。巻き網を運営する11人のうち中型まき網を運営する人が6人で、従業員数は10人～21人である。経営者の全員が養殖業に業務を拡張しているのが特徴的である。小型巻き網を運営する人は5人で、従業員はすべて2人

である。経営者の中には煮干し加工と養殖に多角化した人がいる。

煮干し加工を運営する21人のうち巻き網を運営していない人は16人である。その3分の1強が養殖に業務を拡張し、また活魚販売を兼業する人もいる。

養殖業を運営する人は19人で、そのうち煮干し加工を兼業していない人が14人である。その中には、活魚販売を兼業する人が2人いる。

このように褥崎の住民の生産活動は水産業を基盤にし、業種は漁業・イリコ加工・養殖に大きく区分されるものの、実際は、漁業（巻き網）経営と養殖

業、漁業（巻き網小型）経営とイリコ加工・養殖業、イリコ加工と養殖業を兼業し、さらに活魚販売も重なる多角性がこの地区の水産業の特徴といえよう。

#### ② 鉱業（炭鉱）

大正期以降、褥崎地区の近くの神林地区・大加勢地区で炭鉱が開坑する。労働者の多くは流入労働力である。

日鉄北松鉱業所は、1912（大正元）年に開坑した鹿町炭坑株式会社を政府（商工省）が1920（大正9）年に買収した事業所である。1926（大正15）年に加勢坑が開坑され、大加勢（鹿町坑）地区の社宅は職員用170戸・鉱員用798戸の合計968戸に及び、福利厚生施設として購買会・病院・浴場・グラウンド・柔剣道場・毎日映画館を上映する会館が用意されていた（鹿町郷土誌383-393頁）。

神林鉱業所は、1938（昭和13）年に野上東亜鉱業株式会社が開坑したものである。神林炭鉱の社宅は全体で729戸（職員93戸、鉱員637戸）、そのうち神林坑口のある神林地区に564戸、深浦坑口のある深浦地区に165戸あった。福利厚生施設として病院・浴場・配給所・理髪店・会館（映画を毎日上映）が用意されていた（鹿町郷土誌396-400頁）。

こうした炭鉱の開坑と労働人口及びその家族の流入は、旧鹿町町内における農産物や水産加工品の消費市場の確立に寄与したといわれている。同時に、農漁村青年及び一部の中年の中には、「農漁の余剰労働力は無論のこと、余剰ではない者までが潮の満ち寄せるが如く……現金入手が容易で且つ収入の多い炭坑労働へと走るようになった。大屋、褥崎漁業部落も又その例外ではなかった」（鹿町郷土誌409-415頁）という状況であった。

#### ③ 開拓移住

明治期の入植地には、褥崎の半島とやや離れた朝地露地区等が含まれている。この地の草分けは、堤仁蔵家といわれている。さらに第二次世界大戦後には、褥崎地区から新たな開拓移住地として、加勢地区の半島の先の曾辺ヶ崎へ入植が見られる。曾辺ヶ原の開拓は1949（昭和24）年で、約6.3ha（1世帯平均0.57ha）が開拓され、半農半漁で農作物として西瓜・サツマイモ・麦が生産されている。なお、1956年に電気が開通している（鹿町郷土誌357頁）。

## 4 宗教コミュニティの形成

さらに、褥崎地区における宗教コミュニティ形成の過程を見ていきたい。まず褥崎小教区の形成までの経緯、次に褥崎小教区の展開にふれる。なお、褥崎小教区の巡回教会の大加勢教会の設立についても言及する。

### 褥崎小教区の形成

褥崎地区は明治期に入って平戸小教区、明治中期以後に佐世保小教区、昭和初期に神崎小教区の巡回地に位置づけられ、昭和40年代に褥崎小教区として独立する。こうした経緯に沿って教会の設立および小教区の形成の経緯を示すことにする。

#### ① 教会設立以前

1865年3月に長崎大浦で潜伏キリシタンの「信仰告白」があった頃は、表1のように褥崎地区にすでに6家系が居住している。同年6月になると「長崎大浦には切支丹の御寺が建つて居るさうだ、と云う話を黒島の人から伝え聞いて……、有安忠蔵と喜蔵の兄弟が天主堂の門を叩き連絡を通じた」（浦川1928年296頁）と記録されている。正確には、褥崎地区に住む北平の家系の三男の吉浦忠蔵が神崎地区に住む次男の有安喜蔵とともに長崎大浦でプチジャン司教に会ったというものである。また黒島の出口大八が神崎地区・褥崎地区でカトリックの復帰をうながす伝道をし、次いで長崎港沖の伊王島大明寺の芳太郎が褥崎地区で伝道をする（褥崎128年50頁）。こうした江戸末期の動きは、褥崎地区が孤立した存在でなく居住世帯の出身地や親族との間にネットワークが張り巡らされ、長崎における信仰の展開をともにしていたことの証しである。

明治初期（1869年）になると、吉浦忠蔵の養子牧太郎（吉浦藤七の次男）、吉浦仙蔵（藤七の長男）が長崎で公教要理を学び受洗する。その後、明治期の信仰弾圧の中で馬渡島に一時避難した住民が出る一方で、褥崎地区に居住する山村重蔵が二人の伝道士の応援をうけて伝道活動を開始する。吉浦牧太郎・仙蔵をかわ切に明治初期（1872年～1877年）に褥崎地区の全住民がカトリックに復帰する（褥崎128年50-51頁）。

明治中期に、北松地区は平戸小教区の巡回地に位

置づけられる。平戸島の紐差教会の巡回地の中では1878年に黒島に教会が設立されていたため、褥崎地区・神崎地区の信徒は秘蹟（洗礼・初聖体・堅信・婚姻）を紐差教会・黒島教会で授かり、祝日のミサは漁船に乗り合わせて紐差教会に出掛けている。

また、この時期の褥崎地区でのミサは、吉浦伊勢吉・木村大吉・新立栄七等の民家（民家御堂）で行われ、司祭の巡回は1年に数回であった。そのうち復活祭の時期には、黙想会を兼ねて司祭が1週間程度滞在したという（褥崎128年56頁）。この時期の褥崎地区における宗教教育（教え方）は、吉浦伊勢吉（吉浦伊勢吉家第1世代）・木村大吉（木村伝作家第2世代で長男）・新立ソナ（新立宗エ門家第1世代で三女）が担当する。

1897（明治30）年に、黒島地区と佐世保地区が平戸地区から分離・独立する。褥崎地区は神崎地区・大島地区・梶ノ浦（浅子）地区・大崎地区とともに、佐世保小教区の巡回地の一つに位置づけられる。巡回地のうち梶ノ浦地区には炭坑があり信徒数が最も多く、すでに教会が設立されていたため、褥崎の信徒は、秘蹟のうち洗礼を佐世保（谷郷教会）・梶ノ浦教会で、婚姻を佐世保（谷郷教会）で授かることになる（褥崎128年62頁・82-87頁）。

## ② 教会の設立

明治中期～大正期の長い期間（1897-1919年の20年強）にわたって佐世保小教区を日本人の片岡桐栄司祭が担当する。この間に、褥崎地区に教会建設の機運が生まれ、教会建設の積立を開始する。とはいえ、1916（大正5）年の教会建設までに相当の年数がかかったのは、明治中期に48世帯、約200人の信徒数に達していたものの、地区の主要産業の水産業が安定に欠けることに原因があったといわれる。巻き網の不安定さを言い当てる「まき網は三代続けるな」（小佐々町郷土誌475頁）という口伝が旧小佐々町にあったといわれるが、実際、信仰・教会建設のリーダー役であった有力な網元（網ダンナ）が、この時期、漁業経営の失敗で褥崎地区を離れている。

年数を経たものの、1916年、信徒の労力奉仕も加わって吉ノ浦の海岸（当時の地名で、三年ヶ浦1474の4番地）に褥崎教会（旧教会）が建設される。なお旧教会は加勢地区の炭坑事務所の廃材を用



現在の褥崎教会

い、天井の極度に低い建物であったため、ミサで起立をすると堂内が暗くなるほどだったという（褥崎128年64頁）。

さらに、昭和40年代（1960年代後半）になると新教会建設の機運が高まり、集落の中心地の山林が購入される。新教会の建設費用は、信徒世帯を等級割（1～3等の3段階と等級外）にして毎月集金し捻出している。この当時の信徒数は約400人とされ、表3を参考にすれば60世帯程度と推定される。旧教会の土地・建物は、信徒等に売却されて新教会の設立基金にされている（褥崎128年69-72頁）。

## ③ 小教区の形成

褥崎地区と同様に平戸小教区・佐世保小教区の巡回地であった旧小佐々町神崎地区に1927（昭和2）年に教会が建設され、神崎地区は佐世保小教区から独立する。褥崎地区は大加勢地区・浅子地区・大崎地区とともに、神崎教会の巡回地となる（神崎教会献堂50年記念55頁）。この神崎小教区の時期になると、主任司祭の巡回は2ヶ月に1回になる。また1931年には、大加勢地区に旧大加勢教会が建設される（褥崎128年68頁）。

さらに、1967年10月の新教会の献堂式の2ヶ月前に、褥崎地区が小教区として独立する。褥崎小教区の設立に際して、大加勢地区が褥崎教会の巡回地になる（褥崎128年73頁）。

## 小教区の展開

次に褥崎地区の信仰の特徴と褥崎小教区の巡回教

会の大加勢教会の状況を見ていきたい。

### ① 信仰と生活

褥崎地区の特徴は、信徒である住民・世帯が同業関係でも結ばれ、信仰の共同と同業関係が重複する「意図的コミュニティ」の類型に位置づけられることである。意図的コミュニティの特徴が顕現する褥崎小教区の展開を二つあげることができよう（褥崎128年65頁・73-75頁）。

第一は、保育園の設立である。小教区として独立後、褥崎地区の住民が保育園の設立を要望し、初代主任司祭の今村留市司祭が手続きを担当する。純心聖母会（本部長崎市）が園舎を設立し、1972（昭和47）年にしとね保育園を開設する。保育は純心聖母会の神崎修道院から4人のシスターが通勤して担当する。すなわち、同業関係でもある信徒世帯の中で保育に欠ける状況を信徒が共通認識し、教会が信仰領域の外に役割を付加する展開である<sup>(5)</sup>。

第二は、教会における同業（水産業）関係の行事の実施である。褥崎教会は、大多数の信徒が水産業に従事するために漁師の保護聖人といえる聖ペトロに奉獻されている。加えて、2代目主任司祭の小瀬良明司祭の時（1988年2月）に、鹿町町漁協横の波止場で操業安全祈願ミサを実施する。このミサには全信徒の漁船が参加し、教会をあげての行事になる。すなわち、同業関係にある信徒の職業領域におけるリスクに対して、教会の宗教機能が拡張・対応した展開である。

次に、褥崎地区の信仰教育は、明治期以降、信徒の教え方が性別・年齢別に担当してきた。教育単位として父組・青年組・子供組・母組があり、さらに1902（明治35）年以降は、明治期の移住地である朝地露で教え方が誕生し、地区単位の信仰教育も実施される（褥崎128年65頁）。この教え方による信仰教育は、小教区の誕生・保育園の開設の時期まで続いたと思われる。また葬礼と埋葬は、長らく信徒の手で行なわれていたという。

さらに、信徒組織は、長らく宿老（長）を中心とする組織であった。小教区の誕生後は、信徒使徒職評議会が結成されて会長を中心とする組織に改組される。また1978（昭和53）年に、性別・年齢別組織の婦人会・青年会が結成・復活する。

### ② 大加勢教会

褥崎教会の巡回教会である大加勢教会（旧大加勢

教会）は、旧鹿町町下歌ヶ浦免に1926（大正15）年に開坑した日鉄北松鉱業所の加勢坑の鉱員家族が設立した教会である。

当時の鉱員家族は、表8の大加瀬教会に転入しその後転出した世帯の一覧から、外海地区25世帯（長崎・田平等を經由）・第1次移住地の五島地域6世帯・第3移住地の田平地区7世帯等が主な出身地であることが分かる。

初期の信徒によれば、「昭和3年5月、八幡製鉄所・鹿町炭坑加勢坑に就職した。来てみて驚いたことは、信者がいると話は聞いていたが、誰が信者やら教会はどこにあるやら皆目分からない。……そのうち、出津、黒崎、浦上、田平出身の信者が現われて10人以上となった」（褥崎128年211頁）という。1930（昭和5）年には、従業員宅で宗教行事（教友会）を開始し、指導者が信徒宅を戸別訪問して教会の必要性を説いたという。

日鉄北松鉱業所の協力と神崎小教区司祭の許可を得て、1931（昭和6）年、炭坑の横の高台にトタン葺きの18坪の教会が設立される。費用は35世帯の信徒の積立と日鉄北松鉱業所からの若干の資金援助で充当し、不足分を2人の指導者の借入金で補ったという。

この時期、司祭の巡回は月に1回で、日曜日は伝道士の先唱で祈りを捧げていたという。また毎年、7月の最初の日曜日に、安全祈願ミサが日鉄北松鉱業所の要人の参加を得て行われていた。『『教会のある炭鉱』は信徒にとっては、よほど魅力だったのだろう……信徒の数も炭鉱の発展とともに増え」、第二次世界大戦中には約100世帯に達したという（褥崎128年210-212頁）。

第2次世界大戦後も、炭坑鉱員の増加とともに信徒数が増加して教会が手狭になったこと（昭和20年代に130～140世帯）、ボタ山際に教会があり危険であったため、大加勢教会は日鉄北松鉱業所の費用で新築移転する。新しい教会の所有は日鉄北松鉱業所といわれる。

しかし、昭和中期（1955年）に入ると石炭産業の斜陽とともに、日鉄北松鉱業所の生産規模は縮小し、信徒世帯の他出が頻繁となり、ついに1963（昭和38）年に、日鉄北松鉱業所の加勢坑が閉鎖される。その結果、大加勢の信徒世帯数は30世帯に急減する（褥崎128年278-279頁）。

表 8 加勢地区からの転出者の出身地と転出先

	出身集落	世帯数	転出先	備 考
外海地区	出 津	10	潜竜1・神戸市1	1940年1・1948年1 出津より転入
	赤 首	4	御橋炭鋳1	1944年浦上・1940年出津より・1936年転入
	大 野	8	田平	1933年田平より転入1
	黒 崎	3	田川市1	1931年浦上より転入2
	合 計	25		
平戸市	田 崎	1		
	京 崎	1		
	田 平	7	田平1・神田鋳2	1944年田平より1・1941年1 転入
	紐 差	4	神田鋳1・潜竜1	1944年転入1
	平 戸	6	佐賀1・小値賀1・福岡1	1937年1・平戸1・潜竜1より転入
	木ヶ津	2	相浦1	1937年木ヶ津より転入1
	宝 亀	2	潜竜1	
	獅 子	1		
	古 江	1		
	山 野	3	神田鋳2	
	神 鳥	1	御橋炭鋳1	
	下神崎	1	神田鋳1	
	合 計	30		
長崎市	中 町	1	神田鋳1	
	稲 佐	1		1949年転入
	飽ノ浦	1	矢岳1	
	浦 上	1	田平1	
	深 浦	1	大島1	
	高 島	1		1932年転入
	合 計	6		
佐世保市	蔭ノ尾	1	神田鋳1	
	加 勢	6	八幡1	
	大 屋	1		
	黒 島	1		
	合 計	9		
五島地域	桐	1	神田鋳1	出津より転入
	水ノ浦	2		1934年転入2
	仲 知	1	田平1	1941年転入
	野 首	2		
	合 計	6		
宮 崎	2			
合 計	78			

出典：『褥崎128年—褥崎小教区沿革史—』（1992年）の236-247頁のデータをもとに作成。

注：出身地が不明の世帯は除いて集計している。

現在の教会（新教会）は、1948（昭和23）年に建て替えられた旧教会の老朽化と教会土地が借地であったこと、さらに駐車スペースが小さく自動車利用に対応していなかったため、1991（平成3）年に加勢地区に建設されたものである。この建設の費用は、長崎教区・佐世保地区の各教会・褥崎教会および出身者の資金援助と寄付による。なおこの時の信徒世帯は約50世帯である（褥崎128年218-228頁）。

## 5 コミュニティの展開—地理的広がりとは—

さらに、信仰の共同と同業関係を特徴とする意図的コミュニティを形成した褥崎地区の住民の生活の展開の一端を住民の居住地の移動という観点から把握する。第一は、褥崎地区の住民の生活（居住地）が開拓移住地の半島の範囲から地理的に拡大し、以前よりも広範囲の宗教コミュニティを形成する展開である。第二は、褥崎地区および北松・佐世保・平戸地区の外に住民・世帯が他出する傾向である。加えて、大加勢地区における他出の状況にも言及した

い。

### 宗教コミュニティの広域化

#### ① 褥崎地区外（近隣地区）における分家の創出

表9は、表3の地区内世帯数に褥崎地区外への他出者のうち旧鹿町町内に移動した住民・世帯を加えたものである。褥崎地区の世帯数（推定値）は、昭和初期頃にまでに江戸末期の移住世帯（第三世代）39世帯・明治期の移住世帯（第二世代）15世帯の54世帯、さらに昭和中期（1955年）に江戸末期の移住世帯（第四世代）35世帯・明治期の移住世帯（第三世代）32世帯の67世帯である。

こうした地区内居住者の増加に加えて、昭和中期以降、褥崎地区の住民が旧鹿町町内に移動する傾向が顕現する。すなわち、昭和中期に江戸末期の移住世帯（第四世代）5人（世帯）・明治期の移住世帯（第三世代）1人（世帯）の6人（世帯）、昭和後期に江戸末期の移住世帯（第五世代）12人（世帯）・明治期の移住世帯（第四世代）1人（世帯）

の13人（世帯）、平成期に明治期の移住世帯（第五世代）3人（世帯）である。

こうした旧鹿町町内の移住先は、表10のように、昭和中期（1955年）に、この時期の中心地の加勢地区・炭鉱のあった大加瀬地区に4人（世帯）、加勢地区の先の半島の開拓地の曾辺ヶ崎に2人（世帯）である。昭和後期の移住先は、明治中期に居住が始まった褥崎地区内の朝地露2人（世帯）に加えて、褥崎地区に隣接する太郎ヶ浦2人（世帯）、神林地区5人（世帯）、加勢・大加瀬地区に4人（世帯）である。

旧鹿町町内の移住地のうち開拓地の曾辺ヶ崎地区について補足すれば、実際には、表11に表示する9世帯が1949（昭和24）年に入植している。主な入植世帯は、吉浦末蔵－梅蔵の家系（第二世代の次三男の第三・第四世代）の4世帯、新立宗エ門の家系（次三四男を第一世代とする第三世代）の3世帯等で、特定の家系の入植という特徴が見られる。

表9 各世代（男子）の地区内・近隣居住の状況

推定時期	江戸末期		明治30年代 (1900年)		昭和初期 (1925年)		昭和中期 (1955年)		昭和後期 (1985年)		平成期	
	世帯(あるいは人数)	地区内世帯数	近隣世帯・人数	地区内世帯数	近隣世帯・人数	地区内世帯数	近隣世帯・人数	地区内世帯数	近隣世帯・人数	地区内世帯数	近隣世帯・人数	
江戸時代末に移住の家系	第一世代	第二世代		第三世代		第四世代		第五世代		第六世代		
	11	24	-	39	-	33	5	29	12	-	-	
明治以降に移住の家系	-	第一世代		第二世代		第三世代		第四世代		第五世代		
	-	9	-	15	-	32	1	24	1	12	3	
合計	11	33	-	54	-	65	6	53	13	-	3	

出典：『褥崎128年—褥崎小教区沿革史』（1992年）の家系図をもとに作成。

注：近隣とは旧鹿町町への移住者・世帯を指す。昭和末期には褥崎地区内の朝地露への移住2を含む。

表10 旧鹿町町内の移住地

	昭和中期（1955年）			昭和後期（1985年）			平成期	合計
	江戸期 第四世代	明治期 第三世代	合計	江戸期 第五世代	明治期 第四世代	合計	明治期 第五世代	
*朝地露				1	1	2		2
神林				5		5		5
上矢岳							3	3
曾辺ヶ浦	1	1	2					2
(大)加勢	4		4	4		4		8
太郎ヶ浦				2		2		2
合計	5	1	6	12	1	13	3	22

出典：『褥崎128年—褥崎小教区沿革史』（1992年）の家系図をもとに作成。

注：\*の朝地露は、通常、褥崎地区に含まれものの、やや離れた地であるため地区外の移住に加えた。

表 11 曾辺ヶ崎地区への移住世帯

		家系	第1世代		第2世代		第3世代		第4世代		備考
1	木村 安一	木村伝作家	伝 作		次男	源太郎	四男	本人			その後関西移住
2	新立 順一	新立宗エ門家	次男	弥助	次男	宇太郎	長男	本人			
3	新立喜三郎	新立宗エ門家	三男	喜八	長男	宗次郎	長男	本人			
4	新立 猛	新立宗エ門家	四男	藤吉	長男	藤三郎	長男	本人			
5	吉浦 保	吉浦末蔵家	次男	梅蔵	次男	又蔵	三男	末蔵	四男	本人	
6	吉浦菊次郎	吉浦末蔵家	次男	梅蔵	次男	又蔵	四男	本人			
	吉浦 常行	吉浦末蔵家	次男	梅蔵	次男	又蔵	四男	菊次郎	三男	本人	
7	吉浦和三郎	吉浦末蔵家	次男	梅蔵	三男	磯吉	長男	本人			
8	吉浦延太郎	吉浦末蔵家	次男	梅蔵	三男	磯吉	三男	本人			
9	吉浦 春義	吉浦久米蔵家	長男	安右衛門	次男	本人					

出典：『褥崎 128 年－褥崎小教区沿革史－』の「褥崎教会世帯主名と転出家族名の紹介・年表・家系図をもとに作成した。

表 12 各世代（女性）の地区内居住・移動の状況

推定時期	江戸末期	明治30年代(1900年)				昭和初期 (1925年)				昭和中期 (1955年)				昭和後期 (1985年)				平成期			
		地区内	地区内	旧鹿町町	北松・佐世保・平戸地区	他地区	地区内	旧鹿町町	北松・佐世保・平戸地区	他地区	地区内	旧鹿町町	北松・佐世保・平戸地区	他地区	地区内	旧鹿町町	北松・佐世保・平戸地区	他地区	地区内	旧鹿町町	北松・佐世保・平戸地区
江戸時代末に移住の家系	第一世代	第二世代				第三世代				第四世代				第五世代				第六世代			
	3	3	-	-	-	22	-	2	-	15	10	16	14	8	9	12	28	-	-	-	-
明治以降に移住の家系	-	第一世代				第二世代				第三世代				第四世代				第五世代			
	-	1	-	-	-	7	-	2	8	10	-	9	26	8	-	11	16	2	10	8	17
合計	3	4	-	-	2	29	-	4	8	25	10	25	40	16	9	23	44	2	18	8	17

出典：『褥崎 128 年－褥崎小教区沿革史』(1992年)の家系図をもとに作成。

注：近隣地区とは旧鹿町町への移住者・世帯を指す。

## ② 女性の褥崎地区外への居住

こうした褥崎地区からの他出傾向は、女性も同様である。表 12 は、各時期における女性の生活展開（移動）を示したものである。このうち近隣地区（旧鹿町町と北松・佐世保・平戸地区）への移動を見ていきたい。褥崎への開拓移住期の未婚女性は、移住世帯の男性と結婚するか独身で教え方を担当して地区内で生活している。その次の世代（明治 30 年代）も地区内居住が 4 人である。

しかし、昭和初期になると地区内居住 29 人、北松・佐世保・平戸地区 4 人、他地区 8 人で、この時期から北松・佐世保・平戸地区への他出が始まる。表 13 に示しているように、他出先は浅子地区、相浦・大崎地区、佐世保市、田平地区である。昭和中期（1955 年）の他出先地は、地区内 25 人、旧鹿町町内の近隣地区 10 人、北松・佐世保・平戸地区 25 人と近隣地区への他出が大きく増加する。旧鹿町町

内は、褥崎地区内の朝地露 3 人、加勢地区・大加瀬地区 7 人である。また北松・佐世保・平戸地区では田平地区 8 人、平戸地区 6 人が多く、神崎地区・江迎地区も 3 人である。昭和後期の他出地は、地区内居住 16 人、旧鹿町町 9 人、北松・佐世保・平戸地区 23 人で、近隣地区への他出が 2 倍になる。旧鹿町町内は太郎ヶ浦 4 人、上矢岳 2 人、神林 1 人等で、いずれも褥崎の近接地である。北松・佐世保・平戸地区では、田平地区 6 人、平戸地区 4 人、神崎地区 4 人等で、地区外の主な他出先は関西 16 人、関東地区 12 人である。

## ③ 褥崎地区外（近隣地区）居住の背景と信仰コミュニティの維持

昭和中期（1955 年）以降に生じた褥崎の住民の居住地の広がり社会的要因をいくつか指摘することができる。

まず、全般的に褥崎の半島地区の世帯数が飽和状

表 13 女性の旧鹿町町内・町外の他出先

	昭和初期（1925年）			昭和中期（1960年）			昭和後期（1990年）			平成期	
	江戸期 第三世代	明治期 第二世代	合計	江戸期 第四世代	明治期 第三世代	合計	江戸期 第五世代	明治期 第四世代	合計	明治期 第五世代	
*朝地露				3		3				1	4
神林							1		1	1	2
上矢岳							2		2	5	7
曾辺ヶ浦										1	1
(大)加勢				7		7				2	9
太郎ヶ浦							4		4		4
旧鹿町町内							2		2		2
旧鹿町町小計				10		10	9		9	10	29
江迎				1	2	3	1		1		4
神崎				2	1	3	4		4	3	10
佐々・小佐々				2		2	1	1	2	2	6
浅子（梶ノ浦）	1		1	1		1	1		1		3
相浦・大崎		1	1				1		1	1	3
黒島					1	1		1	1		2
佐世保市（その他）	1		1		1	1		1	1		3
田平		1	1	7	1	8	3	3	6		15
平戸				3	3	6		4	4	1	11
松浦							1	1	2	1	3
北松・佐世保・平戸地区小計	2	2	4	16	9	25	12	11	23	8	60
長崎				1		1	1	2	3	1	5
その他の長崎県							1	2	3		3
長崎県内小計				1		1	2	4	6	1	8
九州（長崎県外）		4	4	1	4	5	2	2	4	2	15
中国・四国					1	1				3	4
大阪		2	2		2	2	10	4	14	6	24
関西（大阪以外）				1		1	1	1	2	1	4
愛知・中京		1	1		2	2	2	2	4	2	9
関東				1		1	10	2	12	2	15
その他								1	1		1
国内小計		7	7	3	9	12	23	10	37	16	72
ブラジル		1	1	9	10	19		1	1		21
シスター				1	7	8	3	1	4		12
合計	2	10	12	40	35	75	49	27	80	35	202

出典：『褥崎128年一褥崎小教区沿革史』（1992年）の家系図をもとに作成。

況に達したことである。家系・家族による相違があるものの、地区での子ども世代の分家の創出が困難になり地区外（近接地）に分家が創出されたと見ることが出来る。褥崎の住民に対する聞き取りでは、「褥崎では長男が跡を継ぐが、分家として家を建てる。農地は分割する。家々で異なるが、兄弟の男に均等に区分している。ブラジルに行った人の名義がそのままというケースもある。親族がその農地を利用しているのとそのままのケースがある」というもので、数世代に及ぶ褥崎地区の土地の細分化（分家の創出・農地の分割）のために、地区外に居住地が拡張したと見ることができよう。

次に、地区の主産業の転換が影響したと推測される。すなわち、農業から漁業・養殖事業・煮干し加

工・活魚販売といった水産業に生産基盤が転換した結果、地区内における一定規模の農地の所有が必ずしも生活の基盤でなくなったため、居住地選択の自由度が以前に比べて増したことである。

さらに、旧鹿町町内の道路整備と自動車交通（公共交通・私交通）の発達によって日常的移動が容易になったことである。すなわち、海上交通からの交通手段の転換は、居住地の立地を地区内の内陸の道路沿いに変更させるとともに地区外に広域化させたといえる。

しかし、褥崎地区の地域・他出者に関する三つの状況から、住民の旧鹿町町内の移動は宗教コミュニティの解体を結果するものでないといえる。

第一に、地区外の移住地が褥崎に近接しているこ



表 14 旧鹿町町外への他出 各世代（男子）の世帯状況

推定時期	明治30年代(1900年)		昭和初期(1925年)		昭和中期(1955年)		昭和後期(1985年)		平成期	
地区内外の居住状況	北松・佐世保・平戸地区	地区外	北松・佐世保・平戸地区	北松・佐世保・平戸地区外	北松・佐世保・平戸地区	北松・佐世保・平戸地区外	北松・佐世保・平戸地区	北松・佐世保・平戸地区外	北松・佐世保・平戸地区	北松・佐世保・平戸地区外
江戸時代末に移住の家系	第二世代		第三世代		第四世代		第五世代		第六世代	
	1	-	8	10	16	24	4	16	-	-
明治以降に移住の家系	第一世代		第二世代		第三世代		第四世代		第五世代	
	-	-	3	-	2	6	10	21	3	11
合計	1	-	11	10	18	30	14	37	3	11

出典：『褥崎128年—褥崎小教区沿革史』（1992年）の家系図をもとに作成。  
注：地区外は、北松・佐世保・平戸地区外を指す。

とである。褥崎地区内の朝地露と褥崎地区に隣接する加勢・大加瀬・曾辺ケ崎・太郎ケ浦・神林・上矢岳の各地区への移動の大半は、褥崎教会のある褥崎地区の隣接地区における分家の創出と見ることができる<sup>(6)</sup>。

第二に、褥崎教会の立地の変更が信徒の居住状況を反映していることである。すなわち、海上交通が移動手段の中心であった時の海岸の立地から、県道の整備と自家用車交通の普及とともに立地が内陸に移行しするのである。

第三に、他出者の世帯内で類縁（宗教）・地縁関係が維持されていることである。すなわち、褥崎地区内の朝地露および褥崎地区に隣接する加勢・大加瀬・曾辺ケ崎・太郎ケ浦・神林・上矢岳の各地区への女性の他出が、褥崎地区外への男性の他出（分家創出）と一致し、旧鹿町町内の移動が婚姻に随伴すると見られるからである。こうした状況の一端は、家系図で確認されている。他出世帯で社会関係（類縁関係・地縁関係）が保持されていることは、信仰の継続を支持・補強するといえる。

以上の点から、褥崎地区の宗教コミュニティは、住民の他出によって解体に向かうと見るよりも、旧鹿町町への他出した信徒世帯を包摂し、地理的に広域化しているとする方が妥当であろう。

#### 旧鹿町町外への他出

次に、旧鹿町町外への他出者（世帯）を見ていきたい。表14は、旧鹿町町外への移住の男性（とその世帯を含む）を示したものである。表9の地区内

表 15 11家系以外の世帯の移住

	明治30年代(1900年)		昭和初期(1930年)	
ホンコハラ家	2	梶ノ浦・浅子		
浜道家			1	田平
大江家			1	平戸
田島家			1	加勢
堤家			1	田平
山下家			1	長崎
竹川家			1	佐世保
山田家			1	加勢

出典：『褥崎128年—褥崎小教区沿革史』（1992年）における記述・年表等から抽出した。  
注：表示の11家以外の家族で、移住時期・先が判明した家

世帯数の推移と対比すると、明治30年代までは地区内における世帯の増加が見られる一方、旧鹿町町外への他出世帯はあまり見られない。しかし昭和初期の時期になると、地区内の世帯数の増加と同時に他出者（世帯）が急増する。江戸末期の移住世帯（第三世代）18人（世帯）・明治期に移住世帯（第二世代）3人（世帯）の21人（世帯）で、さらにこの11家系以外の家系に関して表15の7世帯が加わる。さらに昭和中期（1955年）になると、江戸末期の移住世帯（第四世代）40人（世帯）・明治期に移住世帯（第三世代）8人（世帯）の48人（世帯）に増加し、昭和後期には、江戸末期の移住世帯（第五世代）20人（世帯）・明治期に移住世帯（第四世代）31人（世帯）の51人（世帯）に達する。

さらに表4で旧鹿町町外への他出地を見れば、昭和初期の他出の半数は北松・佐世保・平戸地区内であ

る。佐世保市・田平地区・平戸地区が他出先として目立つ。また国外のブラジル移住が始まっている。昭和中期（1955年）になると、男性の5分の2が旧鹿町町外に他出し、旧町外への他出が始まる。近隣の北松地区への他出が18人で、主な他出先は田平地区・平戸地区・佐々・小佐々地区である。北松・佐世保・平戸地区外は14人で、大阪・関西が主な他出先である。また国外のブラジルが12人である。昭和後期には、地区内居住者（世帯）と旧鹿町町外への他出者がほぼ同数になる。このうち近隣の北松・佐世保・平戸地区は14人で複数の地区に分散する一方で、北松・佐世保・平戸地区外が26人に急増し、大阪・関西・愛知県等が主な他出地となる。この時期のブラジル移住は7人であるが、これは時期推定のズレと見ていいだろう。

こうした男性の傾向は、女性も同様である。表12の女性の北松・佐世保・平戸地区以外への他出は、明治30年代の2人が昭和初期に8人となり、昭和中期（1955年）に40人、昭和後期には44人に達する。主な他出（先）を表13で見れば、明治期はいずれもシスター（志願者）である。昭和初期の主な他出地は、九州（長崎県以外）・大阪で、昭和中期の主な他出地はブラジルが19人と多く、他に九州内5人、シスター（志願者）が8人である。昭和後期の主な他出地は、関西16人・関東地区12人、シスター（志願者）が4人である。

こうした褥崎地区の住民の他出について、北松・佐世保・平戸地区内の移動を含めて、その特徴を整理してみたい。

まず、男性の場合である。第一に、昭和初期以降、男性の過剰人口が常態化することである。褥崎地区・旧鹿町町内の居住者の増加に加えて、旧鹿町町外への他出者が現れている。旧鹿町町外への他出者数は、昭和初期に旧鹿町町に居住する人数の3分の1、昭和中期には2分の1、昭和後期には3分の2に達する。

第二は、旧鹿町町外への他出が、世代が進行するとともに北松・佐世保・平戸地区から都市（工業）地域に移行する傾向である。すなわち、昭和初期には、北松・佐世保・平戸地区の田平や平戸といったカトリックのコミュニティが存在する地区への選択的移動が特徴的で、移動は宗教行為の様相を帯びるものである。こうした移動はその後も存続するもの

の、昭和中期以降は阪神・中京地区等の都市（工業）地域への他出が急増する。その多くが学校教育の一環である就職指導や進路指導に基づく移動と見られ、事業所や学校のある都市（工業）地域への選択的移動が主流になる。つまり、移動の非宗教化（世俗化）であり、移動形態として離家離村、第一次産業（水産業）からの離脱、学校教育を窓口とした移動という特徴が指摘できよう。

次に、女性の場合である。第一は、昭和中期（1955年）までの旧鹿町町外の主な移動先が、北松・平戸・佐世保地区のカトリック地区という点である。この女性の移動先への男性の移住も若干見られることから、婚姻後の移動というケースも想定できる。しかし、その大半は移動先のカトリック信徒との婚姻と見るのが妥当で、女性の移動の特徴として家族形成と宗教行為をあげることができる。

第二は、昭和後期以降も北松・佐世保・平戸地区内への婚姻にともなう女性の他出は存続するものの、地区外への他出が主流になることである。すなわち、阪神地域・関東等の都市地域への移動で、男性と同様に学校教育を窓口にした非宗教的で婚姻を目的としない移動に移行したといえよう。おそらく、移住先の都市地域で信徒以外との婚姻が増加していると推測されよう。

### 大加勢地区における他出

大加瀬地区における他出の状況にもふれておきたい。大加勢地区の住民のかなりが日鉄北松鋳業所の加勢坑の鋳員家族であったため、1963（昭和38）年の日鉄北松鋳業所の加勢坑が閉鎖とともに多くの大加勢教会の信徒が他出する。しかし30世帯の信徒が残存していることから、大加勢教会に鋳山家族以外の信徒も在籍したと見ることができる。おそらく残存世帯の多くは、褥崎地区とともに他の北松のカトリック地区から大加勢地区・加勢地区等への移住世帯であったと推測できよう。

表8で、加勢坑の閉山後の他出先を見ると、北松・平戸地区内の潜竜・御橋等を含む存続中の炭鉱・炭鋳のある地が多いことが特徴である。そのため、その移動は、いわゆる「山から山の移動」の様相を呈するものといえよう。その一方で、旧鹿町内の矢岳や近隣地区の田平等への移住も見られ、カトリック信徒の居住地（出身地・親族居住地等）が移

動先に選択される傾向もうかがえよう。

## 6 第2次移住地の形成と展開—その社会的特徴—

### コミュニティ形成の社会的特徴

本稿では、長崎県佐世保市褥崎地区を事例にして、江戸後期以降の信徒の移動の時期区分の第2次移住地において、(1) 分家の創出による地区の世帯(人口)の増加、(2) 宗教コミュニティ形成の志向性、(3) 常態的な挙家離村による人口の流出という3つの事象が生じたことと、(1)(2)に関連する要因として移住地における生産関係の転換と(3)に関連要因する事象として移住地の狭小性(狭小化)の及ぼす影響を解明しようとした。すなわち、褥崎地区への初期の移住の経緯にふれた上で、(1)に関して、移住後の定住状況、(2)に関して、類縁(信仰)関係の制度化の把握をめざし、また(1)(2)の関連要因として、農業経営から漁業・水産加工業への生産基盤の転換の把握をめざした。次に(3)の褥崎地区のコミュニティの展開に関して、地区の人口動向—分家の創出と他出—とその関連要因として、褥崎地区の近接地および佐世保・北松地区の状況等の把握をめざした。

まず、(1)に関して判明したのは、褥崎地区への移住が平戸藩の許可を得た江戸末期における安定した農業経営をめざす開拓移住だったことである。草分けの世帯は家系で8家系10世帯程度、五島地域から褥崎の半島およびその付け根への移住で、その後の時期に移住した世帯は神林地区沖の赤島や長串山の山麓の朝地露等に居住する。江戸期の入植で興味深い点は神崎地区(佐世保市旧小佐々町)と関係が深いことである。明治期の移住の特徴は、五島地方から他の地域を経由した移住という点である。さらに明治期以降、多くの家系において世帯(分家)が創出されている。資料で確認された数値で、江戸末期に移住した11世帯の第二世代が24世帯に増加し、明治期に移住の9世帯とともに33世帯に増加する。

次に、(2)に関して判明したのは、江戸末期の世帯が出身地や親族との間にネットワークを張り巡らしていたこと、伝道等を通して明治初期に全住民がカトリックに復帰したことである。ミサが長らく

民家御堂で行われた後、明治中期以降に教会建設の機運が生まれ、大正期に教会が建設される。現在の教会が建設されるのは、その半世紀後である。小教区に関しては、明治中期に平戸小教区の巡回地に位置づけられ、その後は、佐世保小教区、昭和初期に神崎地区の巡回地となり、新教会設立時に小教区として独立する。この褥崎地区の特徴といえるのが、信徒が同業関係でも結ばれる「意図的コミュニティ」に分類できることである。

さらに、(3)に関して判明したのは、褥崎地区の世帯数が昭和初期頃に54世帯、昭和中期に67世帯に増加する一方で、昭和初期以降に他出傾向が現われる点である。女性の場合、昭和初期に地区内居住29人対して近隣地区(北松・佐世保・平戸地区)4人・他地区8人で、この時期から近隣地区への他出が始まる。昭和中期には、地区内居住25人に対して旧鹿町町内(近接地区)10人・近隣地区25人・地区外40人、昭和後期には、地区内居住16人に対して旧鹿町町内9人・近隣地区23人・他地区44人で、昭和中期以降は他地区への他出が主流になる。男性の場合、昭和初期に近隣地区11人・他地区10人、昭和中期に旧鹿町町内6人・近隣地区16人・地区外30人、昭和後期に旧鹿町町13人・近隣地区14人・他地区37人で、昭和初期以降の昭和期に近隣地区および地区外への他出が増加し、昭和中期以降は地区外への他出が主流になる。とりわけ昭和中期・昭和後期における旧鹿町町内の移動が特徴的である。

また、(1)(2)の関連要因である農業経営から漁業への生産基盤の転換に関して明らかになったのが、半島地区の開拓移住地における(生産)条件の不利性と土地・農地の細分化に伴う生産基盤の水産業への移行である。初期の一部世帯の小規模漁業の後に明治中期に草分けの家系による親族を構成員とする地曳網の漁労組織を形成される。漁法は、その後、巻き網に刺網・曳網・延縄が加わり、漁労組織も拡大する。動力船が導入された後、褥崎沿岸から北松大島・西彼方面、さらに五島・壱岐の海域に漁場が広がる。昭和中期以降は、安定した漁業収入・経営をめざして、漁業に養殖事業やいりこの加工を兼業する世帯が増加する。

(3)の関連要因の移住地の狭小性(狭小化)に関わるのが、カトリック信徒に特有の均分相続制度

である。すなわち、褥崎地区の土地の狭小性に、各家系・世帯における分家の創出と均分相続制度による土地・農地の細分化・零細化が加わる。褥崎地区内での分家の創出が困難になり、新たな（農業）開拓移住や近隣のカトリック地区への他出が生じる。同時に、主産業の転換と自動車交通での日常的移動の容易さによって近接地で分家が創出されるようになる。その一方で、それを凌駕する勢いで地区外（都市地域）への他出が生じる。都市における労働市場・（労働市場との窓口といえる）学校教育における就職指導等に基づく移動に転じたといえる。

以上から、褥崎地区特有の状況を含みつつも、開拓移住地における分家の創出と宗教コミュニティ形成の志向性、同時に移住地の狭小性と均分相続による土地の狭小化にともなう常態的な人口の流出が生じたこと、が確認された。

#### 褥崎地区におけるコミュニティ形成と移動の特徴

このうち分家の創出と宗教コミュニティ形成の志向性に、生産関係の転換の影響を跡づけることができた。しかし、この水産業への転換は、褥崎地区内および近接地区における世帯数（人数）の増加と正の関係にあるものの、信仰の制度化（教会の設立）は年数がかかり、その関連は複雑である。すなわち、第4次移住地等に見られる外国修道会等による支援が存在しないことが制度化の経年化に関係していることに加えて、宗教領域のリーダーと漁労組織のリーダー（網ダンナ）が重複し、水産業に付随する不安定性が信仰の制度化に影響を及ぼしたと見ることができよう。

さらに、褥崎のコミュニティの展開において興味深い点を二つあげることができる。

第一は、第2次移住地の褥崎地区からの曾辺ヶ崎への開拓移住が見られることである。この移動は、第二次世界大戦後の国の開拓政策に基づくもので、時期区分として第4次移住に位置づけることができる。小規模の開拓地であるために褥崎地区の拡張にとどまるものと理解できるが、移住世帯の状況から特定の親族を単位とした移住であることが判明し、関係性の重複（地縁・類縁・血縁関係）が移住において発動することが確認できる。

第二は、女性の定住と移動の動向である。まず入植時期および明治期における地区内の居住（地区住

民との婚姻と信仰教育）から昭和期における近隣（北松・佐世保・平戸）のカトリック地区への移住（婚姻）への移行である。昭和期の地区外への他出にシスター（志願）も含まれ、地区内・他地区・教役といずれかの宗教コミュニティに所属し、その点で、移動は宗教行為の一つと見ることができる。その一方で、地区外への他出者数が増加を続けて主流になる。すなわち、女性の移動が婚姻を目的にする類縁関係に基づくものから、都市の労働市場を志向し一般制度を利用した非宗教的な移動に転じているといえよう。

加えて、褥崎小教区の巡回地の大加勢地区におけるコミュニティ形成と移動の特徴をあげれば、炭坑の開坑の5年後に大加勢教会が設立されていることである。自動車交通の発達前という事情があるものの、炭鉱事業所による援助と鉱員社会という強い類縁（同業）社会が存在し、褥崎地区の水産業の類縁（同業）社会と分節した類縁（宗教）関係の制度化である。また大加勢地区からの他出は、主として類縁（同業）関係に特有の移動であるとともに、類縁（宗教）関係に基づくと思われる移動も見られる。

なお、本稿は平成24年度～27年度科学研究費助成事業による研究（研究代表者叶堂隆三「移動と定住における類縁関係の発動と制度化に関する研究」課題番号24530641）の成果の一部であることを付記しておく。

#### 注

- (1) 2014年11月に下関市立大学経済学部叶堂ゼミ・加来和典ゼミ合同で長崎県の北松地区調査を実施した。佐世保市褥崎地区および褥崎小教区に関しては、褥崎教会主任司祭の川原拓也神父・浦田初美氏・新立静夫氏・新立松雄氏・吉浦幸治氏・吉浦春夫氏・山村和己氏に聞き取り調査を実施した。
- (2) 『鹿町郷土誌』によれば山林原野の開墾と新田開発が奨励され、「新田開発については従来3年間の年貢を免除されたものが6年に延長され、開畑では本畑同様の収穫があるところが4分の1、地味の悪い切畑では5分の1といったように減税されていた」という（351頁）。
- (3) 表1の下段の家系・家族の中には、挙家で他出した家族が含まれている。
- (4) 大屋地区と褥崎地区の漁業世帯の比率が、明治初期（1870年頃）に4:1、1960年代に2:1であるこ

とから、3:1で推定した。

(5) 旧町の町会議員を経験した信徒への聞き取りで、保育所を建設する際に当時の議員に相談して寄付を受けたという。地域づくりは、褥崎地区の子供の教育環境を整えることからスタートしたという。

(6) 分家の創出以外の旧町内の移動は、挙家での他出世帯の家族員としての他出と見られる。

#### 文献

叶堂隆三、長崎のカトリック信徒の移住と宗教コミュニティの形成—家族戦略から生成された地域戦略と外

国人神父の宣教戦略一、下関市立大学論集 148 号、2014 年

中田武次郎、神崎教会献堂 50 周年記念、神崎教会献堂 50 周年祭実行委員、1980 年。

小佐々町郷土誌編纂委員会、小佐々町郷土誌、小佐々町教育委員会、1996 年。

鹿町町教育員会、鹿町町郷土誌、鹿町町役場、1961 年。

褥崎カトリック教会編集委員会、褥崎 128 年—褥崎小教区沿革史一、褥崎カトリック教会、1992 年。

浦川和三郎、切支丹の復活・後篇、日本カトリック刊行会・帝国書院、1928 年。